

サブタイプ化における認知資源の役割（2）¹⁾²⁾

The role of cognitive resources in subtyping (2)

佐久間 勲*

Isao SAKUMA

要旨：本研究は、知覚者の認知資源がサブタイプ化の過程において果たす役割を検討した。実験では、ディストラクション課題を用いて知覚者の認知資源を操作した上で、ターゲット集団の成員情報を提示し、サブタイプ化に関する変数を測定した。実験1では男性に限定されるものの、ディストラクションの程度が弱い条件では、強い条件と比較をして、ターゲット集団に対してステレオタイプ的な評定をしていた。実験2では、ディストラクションを与えなかった条件では、与えた条件と比較して、ステレオタイプ反証事例の典型性を低く評定していた。加えて男性に限定されるものの、ディストラクションを与えた条件では、ステレオタイプ反証事例を提示しなかった統制条件と比較して、ターゲット集団に対するステレオタイプ的な評定が弱かった。これらの結果は限定されたものではあるが、サブタイプ化の過程において認知資源が必要であることを示唆している。

キーワード：ステレオタイプ、ステレオタイプ変容、サブタイプ化、認知資源

1. 問題

本研究の目的は、サブタイプ化 (subtyping) の過程において知覚者の認知資源 (cognitive resources) が果たす役割を検討することである。

我々は、ステレオタイプを反証する事例に遭遇しても、そのステレオタイプを変えないことが多々ある。この現象の背景にある認知的メカニズムがサブタイプ化である。サブタイプ化とは、ステレオタイプに一致しない成員を集団から切り離して、それらの成員をもとに新しい下位集団 (サブタイプ) を形成する認知的メカニズムである (Hewstone, 1994; Mauer, Park, & Rothbart, 1995; Richards & Hewstone, 2001; Weber & Crocker, 1983)。ステレオタイプに一致しない成員は、ステレオタイプから切り離されるために、集団全体に一般化されない。その結果、ステレオタイプに一致しない成員に遭遇しても、ステレオタイプは変容しない (維持される) のである。

サブタイプ化の過程に影響する要因については、これまでにいくつか指摘されている (Hewstone,

* さくま いさお 文教大学情報学部

1994; Richards & Hewstone, 2001)。それらのうちのひとつが知覚者の認知資源である。前述した通り、サブタイプ化はステレオタイプに一致しない成員をステレオタイプから切り離し、新しい下位集団を作り上げる認知的メカニズムである。既存のステレオタイプとは異なる新しい下位集団を作り上げるためには、推論や理由づけなどの認知活動をしなければならない。こうした活動をするためには、知覚者の認知資源が必要になる。したがって知覚者の認知資源があるときにサブタイプ化が生じやすいのである。実際にYzerbyt, Coull, & Rocher (1999) は、知覚者の認知資源を操作した上で、既存のステレオタイプを反証する事例を提示するという実験を行っている。その結果、認知資源が乏しい条件と比較して、認知資源がある条件では、ステレオタイプ反証事例の典型性を低く評定し、ターゲット集団に対してステレオタイプの評定をすることを見出している。つまり認知資源がある条件では、ステレオタイプ反証事例をサブタイプ化して、既存のステレオタイプを維持したと考えられる。さらに佐久間 (2009) はYzerbyt et al. (1999) の概念的追試を実施している。追試では、ターゲット集団に対する評定、ステレオタイプ反証事例の典型性の評定に加えて、手がかり再生 (cued recall) 課題における記憶の混同 (memory confusion) (Johnston, Hewstone, Pendry, & Frankish, 1994; Taylor, Fiske, Etcoff, & Ruderman, 1978) を用いてサブタイプ化を測定した。³⁾ その結果、認知資源が乏しい条件と比較して、認知資源がある条件では、ターゲット集団に対してステレオタイプの評定をしていた。しかしそれ以外の2つの指標においては、認知資源との関連性を見出すことができなかった。

そこで本研究では、佐久間 (2009) から実験手続きを若干変更した上で、サブタイプ化における認知資源の役割について再検討する。なお本研究では先行研究 (佐久間, 2009; Yzerbyt et al., 1999) と同様に、「認知資源が乏しい条件と比較して、認知資源がある条件では、サブタイプ化が生起するだろう」という概念仮説を再検討する。

2. 実験1

(1) 目的

佐久間 (2009) の実験1、実験2の手続きを踏襲した上で、本研究の概念仮説を再検討する。サブタイプ化の指標として、ターゲット集団に対する評定と、手がかり再生課題における記憶の混同の2つの指標を用いる。さらに実験で提示する成員情報の記述文の自由再生も行わせて、その成績と認知資源の関連についても探索的に検討する。

(2) 方法

実験参加者 一橋大学で「心理学」を受講している26名 (男性21名、女性5名) の大学生であった。実験参加者には、実験に参加することで、心理学の成績に加点されると説明した。

実験計画 ディストラクション課題の程度 (ディストラクション弱条件 (以下、D弱条件) / ディストラクション強条件 (以下、D強条件)) の1要因の参加者間要因であった。実験参加者をランダムにどちらかの条件に割り当てた。

実験の概要、実験手続き、実験材料 実験は、実験参加者の認知資源を操作した上で、「東大生は有能である」というステレオタイプ⁴⁾を反証する事例および確認する事例をそれぞれ2名ずつ提示し、サブタイプ化が生起するか検討するものであった。実験は、教示、刺激、従属変数

の測定などを含む冊子を実験参加者に配布して、集団で一斉に行なった。実験の手続きおよび実験材料は以下の通りであった。

①**カバーストーリー**：実験参加者に対して「数字を覚えた状態で人に関する情報の処理方法を調べる実験である」と説明した上で、実験への参加を依頼した。さらに「実験では人に関する情報として東大生に関するものを使用する」と説明した。

②**認知資源の操作**：認知資源を操作するために、実験参加者にディストラクション課題（9桁の数字を暗唱しながら人に関する情報を見る）を与えた。ただし条件によって暗唱する数字が異なっていた。D弱条件では「123456789」、D強条件では「843917231」の数字を暗唱してもらった。

③**ターゲット集団に関する成員情報の提示**：実験参加者には東京大学の4名の学生の情報を提示した。4名の情報は、名字とその学生に関する4つの記述文からなるものであった。4名のうち2名の情報（ステレオタイプ確証事例）は、4つの記述文のすべてがステレオタイプに一致（有能さを示すもの）していた。残りの2名の情報（ステレオタイプ反証事例）は、4つの記述文のうち2つはステレオタイプに一致する記述文（有能さを示すもの）であったが、残りの2つはステレオタイプを反証する記述文（無能さを示すもの）であった。提示時間は1名につき20秒間であった。なお4名の提示順序に関しては、順序の影響が出ないように2種類のパターンを用意した。

④**9桁の数字の再生**：暗唱した9桁の数字を再生してもらった。さらに9桁の数字に関しては、この後再生することはないので、暗唱する必要がないことも説明した。

⑤**フィラー課題**：成員情報の自由再生課題において新近効果の影響が出ないように、四則演算を1分間行わせた。

⑥**自由再生課題**：③で提示した成員情報（記述文）の自由再生を5分間行わせた。このときに記述する順序は問わないことを説明した。

⑦**手がかり再生課題**：8つの記述文（それぞれの学生から2つずつ）を提示し、それぞれの記述文が誰のものであるか回答してもらった。8つの記述文はすべてステレオタイプに一致するもの（有能さを示すもの）であった。

⑧**ターゲット集団に対する評定**：次の3つの方法を使用してターゲット集団である東大生を評定してもらった。(a) **印象評定**：東大生に対する印象を6つの単極形容詞で評定してもらった（「非常にあてはまる」から「非常にあてはまらない」までの5件法）。(b) **パーセント推定課題**：12個の形容詞を提示して、東大生の中でそれらの形容詞に当てはまる人の割合を0%から100%までの20%刻み（6件法）で回答してもらった。(c) **変動性の知覚**：知的能力全般および性格全般において東大生がお互いにどのくらい類似しているか回答してもらった（「非常に似ている」から「非常に似ていない」までの6件法）。

⑨**課題の困難度の評定**：9桁の数字を暗唱しながら成員情報を見ることがどのくらい困難であったか回答してもらった（「非常にやさしかった」から「非常に難しかった」までの6件法）。

⑩**その他**：デモグラフィック要因に関する質問に回答してもらった。

⑪**ディブリーフィング**：すべての実験参加者が回答を終了した後に、本来の実験の目的を説明した上で実験を終了した。

⑥までは実験者の指示に従って実施したが、⑦以降は実験参加者のペースで回答してもらった。実験にかかった時間は約20分であった。

(3) 作業仮説

仮説1 D強条件と比較して、D弱条件では、手がかり再生課題において上位集団内・下位集団内エラー（ステレオタイプ確認事例同士およびステレオタイプ反証事例同士のエラー）の割合から上位-下位集団間エラー（ステレオタイプ確認事例と反証事例間のエラー）の割合を減じた値が大きいだらう。

仮説2 D強条件と比較して、D弱条件では、東大生を有能であると評定し、有能な東大生の割合を高く推定し、東大生の知的能力に関する変動性を小さく知覚するであろう。

(4) 結果

分析対象となった実験参加者 出身地が外国である、もしくは未記入であるデータ（2名）を除外した。その結果、D弱条件11名、D強条件13名の実験参加者を分析の対象とした。

操作チェック すべての実験参加者が暗唱を求めた9桁の数字を正しく再生することができた。ディストラクション課題が認知資源の操作として妥当なものであったか確認するために、課題の困難度の評定の平均値について分析した。その結果、D強条件 ($M=3.77$) はD弱条件 ($M=1.64$) よりも課題が困難であったと報告していた ($t(22)=4.26, p<.001$)。これらの結果は、ディストラクション課題による認知資源の操作が妥当であったことを示唆するものであった。

記述文の自由再生 実験参加者が再生した記述文の正誤について、社会心理学を専攻する大学生と実験者が独立に判断した。正誤の判断の一致率は90%であった。一致しなかった記述文については、別の社会心理学を専攻する大学生が判断して正誤を決定した。条件別にステレオタイプ確認事例ならびに反証事例に関する記述文の再生数の平均値を算出した（表1）。これらの平均値に関して条件×事例の種類の分散分析（前者は参加者間要因、後者は参加者内要因）を実施した。その結果、主効果、交互作用ともに有意ではなかった ($F_s<1.45, ns$)。

表1 条件ごとのサブタイプ化に関する変数の平均値（標準偏差）

変数の種類	D強条件	D弱条件
記述文の自由再生数（ステレオタイプ確認事例）	3.92 (.47)	4.00 (.51)
記述文の自由再生数（ステレオタイプ反証事例）	4.00 (.32)	4.82 (.35)
サブタイプ化得点	-.060 (.35)	-.012 (.26)
ステレオタイプ得点	4.04 (.42)	4.14 (.47)
ステレオタイプあてはまり度得点	28.75 (15.83)	43.00 (24.18)
知的能力全般の変動性の知覚	4.08 (.49)	3.82 (1.08)

注1) 記述文の自由再生数（ステレオタイプ確認事例、反証事例ともに）の範囲は0～8。

注2) サブタイプ化得点の範囲は-1～+1。数値が高いほどサブタイプ化が生じていることを意味する。

注3) ステレオタイプ得点の範囲は1～5。ステレオタイプあてはまり度得点の範囲は-100～+100。変動性の知覚の範囲は1～6。数値が高いほど東大生を有能である、東大生のうち有能である人の割合が高い、東大生は知的能力全般においてお互いに似ていると評定していることを意味する。

手がかり再生課題による記憶の混同 手がかり再生課題における記憶の混同について、上位集団内・下位集団内エラーと上位-下位集団間エラーに分類した。そして実験参加者ごとに2種類のエラーの割合を算出した。エラーの割合は、潮村（1995）と同様に確率的補正を行って算出

した。そして上位集団内・下位集団内エラーの割合から上位-下位集団間エラーの割合を減じたものをサブタイプ化得点とした(条件別の平均値は表1)。これらの平均値に関して、条件間で差があるかどうかを検討するためにt検定を実施した。その結果、有意ではなかった($t(23)=0.37, ns$)。この結果は、仮説1を支持するものではなかった。

ターゲット集団に対する評定 単極形容詞による印象評定およびパーセント推定課題については、以下の通り得点を算出した。印象評定については、「有能な」「頭がよい」「劣っている(逆転項目)」「知的でない(逆転項目)」の4項目の評定の平均値をステレオタイプ得点とした。パーセント推定課題については、「有能な」「優れている」「頭がよい」「知的である」の4項目の平均値から「無能な」「劣っている」「頭が悪い」「知的でない」の4項目の平均値を減じたものをステレオタイプあてはまり度得点とした。これらの得点の値が高いほど、ターゲット集団である東大生を有能である、つまりステレオタイプ的に評定していることを意味している。この2つの得点と知的能力全般の変動性の知覚の3つの変数に関して、条件ごとの平均値を表1に示した。これらの3つの変数の平均値に関して、条件間で差があるか検討するためにt検定を行った。しかし、いずれも有意ではなかった($t_s < 1.66, ns$)。そこで実験参加者のうち少数であった女性のデータ($n=5$)を除外して、男性のデータ($n=19$)だけを用いて同様の分析を実施した。その結果、ステレオタイプあてはまり度得点において条件間の差が有意傾向であった($t(15)=1.76, p < .10$)。D強条件と比較をして、D弱条件では、東大生の中に有能な人の割合が多いと推測していた($M=31.50$ vs $M=45.71$)。この結果は有意傾向であり、男性実験参加者に限定したものではあるが、仮説2を支持するものであった。⁵⁾

(5) 考察

手がかり再生課題における記憶の混同に関する結果は、佐久間(2009)と同様に仮説1を支持するものではなかった。先行研究では、手がかり再生課題における記憶の混同がサブタイプ化の指標として適切であることを指摘している(Johnston et al., 1994; Park, Wolsko, & Judd, 2001)。しかしこの指標は、性別や人種のような既存のカテゴリーを用いて他者をカテゴリー化していることを測定するためには適している反面(e.g., Taylor et al., 1978)、実験の中で作り上げられた新しいカテゴリー(サブタイプ)を用いて他者をカテゴリー化していることを測定するためには適していない可能性も考えられる。

ターゲット集団に対する評定は、男性実験参加者に限定されるが、認知資源が乏しいD強条件と比較して、認知資源があるD弱条件では、東大生の中に有能な人の割合が多いと推測していた。この結果は仮説2を支持するものであった。ただしこの結果については、D強条件でステレオタイプ反証事例を一般化してステレオタイプを変容した(ステレオタイプ的評定を弱めた)のか、D弱条件でステレオタイプ確証事例を選択的に処理してステレオタイプ的評定を強めたのか、それとも両方の結果が生じたのか明確ではない。この点を明確にするためには、ステレオタイプ反証事例を提示しない統制条件でのターゲット集団に対する評定と比較した上で、条件間の差を検討する必要があるだろう。

実験参加者に提示したステレオタイプ確証事例および反証事例に関する記述文の自由再生の成績については、条件間に有意な差は見られなかった。さらに探索的に本実験で用いたサブタイプ化の指標との相関関係を分析したが、サブタイプ化の指標として適切であることを示唆するような相関関係は見られなかった。つまり本研究の結果は自由再生の成績(再生数)が、サブタイプ

化と関連するものではない可能性が示唆された。

3. 実験2

(1) 目的

Yzerbyt et al. (1999) の実験1と実験2の手続きを踏襲した上で、本研究の概念仮説を再検討する。サブタイプ化の指標として、ステレオタイプ反証事例の典型性の評定とターゲット集団に対する評定の2つの指標を用いる。さらに実験計画として、ターゲット集団に対する成員情報(実験2ではステレオタイプ反証事例)を提示しない統制条件を設けた上で、認知資源が乏しい条件でステレオタイプの評定が弱くなっているのか、認知資源がある条件でステレオタイプの評定が強くなっているのか、それとも両方の現象が生じているのかを検討する。

(2) 方法

実験参加者 文教大学で「社会心理学」を受講している大学生84名(男性38名、女性45名、不明1名)であった。実験参加者には、実験に参加することで授業の成績に加点されると説明した。

実験計画 ディストラクション課題(あり(以下、D条件)／なし(以下、ND条件))と統制条件の1要因の参加者間要因であった。実験参加者をランダムにいずれかの条件に割り当てた。

実験の概要、実験手続き、実験材料 実験参加者の認知資源を操作した上で、「東大生は有能である」というステレオタイプを反証する事例を1つ提示し、サブタイプ化が生起するか検討するものであった。実験は、教示、刺激、従属変数の測定などを含む冊子を実験参加者に配布して、集団で一斉に行なった。実験の手続きおよび実験材料は以下の通りであった。

①**カバーストーリー**：実験参加者に対して「数字を記憶した状態とそうでない状態を比較したときの人に関する情報処理に違いがみられるか調べる実験である」と説明した上で、実験への参加を依頼した。さらに実験では「人に関する情報として東大生に関するものを使用する」と説明した。

②**認知資源の操作**：認知資源を操作するためにディストラクション課題を用いた。D条件では、8桁の数字(「63091279」)を15秒間提示し、実験中はその数字を暗唱すること、最後にその数字を再生してもらうことを教示した。ND条件と統制条件ではディストラクション課題を与えなかった。

③**ステレオタイプ反証事例の提示**：D条件とND条件ではある東大生に関する情報を30秒間提示した。この情報は、「東大生は有能である」というステレオタイプを反証する事例であった。情報には、カテゴリー(東大生)と名字、そして3つの記述文が含まれていた。3つの記述文のうち1つは東大生ステレオタイプを確認する(有能さを示す)ものであり、残りの2つは反証する(無能さを示す)ものであった。

④**ターゲット集団に対する評定**：次の3つの方法を使用してターゲット集団である東大生を評定してもらった。(a) **印象評定**：実験1と同様であった。(b) **パーセント推定課題**：実験1と同様であった。ただし回答方法は0から100の整数で回答してもらった。(c) **変動性の知覚**：東大生がお互いにどのくらい類似しているかを回答してもらった(「非常に似ている」から「非常に似ていない」までの6件法)。

⑤**ステレオタイプ反証事例に対する典型性の評定**：D条件とND条件では③で提示したステレオタイプ反証事例がどのくらい東大生らしかったか回答してもらった（「非常に東京大学の学生らしかった」から「非常に東京大学の学生らしくなかった」までの6件法）。

⑥**その他**：③で提示したステレオタイプ反証事例の記述文の再生（D条件、ND条件）、8桁の数字の再生（D条件）、実験内容やディストラクション課題の困難度の評定（6件法）など操作チェックに関する質問項目や、デモグラフィック変数などに回答してもらった。

⑦**ディブリーフィング**：すべての実験参加者が回答を終了した後に、本来の実験の目的を説明した上で実験を終了した。

③までは実験者の指示に従って実施したが、④以降は実験参加者のペースで回答してもらった。実験にかかった時間は約15分であった。

(3) 作業仮説

仮説1 D条件と比較して、ND条件と統制条件では、東大生を有能であると評定し、有能な東大生の割合を高く推定し、東大生の変動性を小さく知覚するであろう。

仮説2 D条件と比較して、ND条件では、有能さに欠ける東大生（ステレオタイプ反証事例）を「東大生らしくない（典型的でない）」と評定するであろう。

(4) 結果

分析対象となった実験参加者 すべての実験参加者に、①実験の中で東大生に関する情報を見たかどうか、②実験では数字を暗唱することを求められたかどうかを回答してもらった。これらの質問に対して正しく回答していなかった2名を分析から除外した。分析の対象となった実験参加者は、ND条件27名（男性12名、女性15名）、D条件27名（男性13名、女性14名）、統制条件28名（男性12名、女性16名）であった。

ステレオタイプ反証事例の再生 本研究で実験参加者に課したディストラクション課題は、実験参加者がサブタイプ化をするために必要な認知資源を操作するためのものであった。つまり、実験参加者がステレオタイプ反証事例を見ることができないほど、ディストラクション課題が強いものであることは想定していない。そこでディストラクション課題の程度が妥当なものがあったか検討するために、ステレオタイプ反証事例を提示したND条件とD条件の2つの条件で、ステレオタイプ反証事例の再生成績について検討した。ステレオタイプ反証事例に含まれていた3つの記述文のうちのいくつ再生できたか、本研究者が正誤を判断した。その結果、ND条件の平均値は2.85、D条件の平均値は2.67であった。条件間の再生数の平均値に差があるかt検定を用いて検討したが、有意差はなかった ($t(52) = 1.18, ns$)。したがって、本研究で実験参加者に課したディストラクション課題の程度は妥当なものであったと言える。

ターゲット集団に対する評定 単極形容詞による印象評定およびパーセント推定課題については、実験1と同様に得点を算出した。この2つの得点に変動性の知覚を加えた3つの変数について、条件ごとに平均値を算出した（表2）。条件間で3つの変数に差が見られるか検討するために、条件を要因とした1要因の分散分析を実施した。その結果、いずれの変数に関しても条件の主効果は有意ではなかった ($F_s < 1.29, ns$)。そこで探索的に、ターゲット集団に対する評定に関する3つの変数に関して、条件×性別の2要因の分散分析を実施した。その結果、ステレオタイプあてはまり度得点に関しては、条件×性別の交互作用効果が有意傾向であった ($F(2, 76) = 2.75,$

$p < .10$)。性別ごとに条件間の差について多重比較を実施したところ、女性実験参加者ではND条件、D条件、統制条件の間で有意な差は見られなかった ($M = 59.60$ vs $M = 65.64$ vs $M = 59.28$)。一方、男性実験参加者では、D条件と統制条件の差が有意傾向であった ($M = 38.27$ vs $M = 59.56$, $p < .10$)。つまり統制条件と比較して、D条件では、東大生のなかで有能な人の割合を少なく推定していた。ただしND条件 ($M = 49.48$) とD条件、統制条件とND条件の間の差は有意ではなかった。男性実験参加者の結果は、有意傾向ではあり、一部の条件間の差ではあるものの仮説1を部分的に支持するものであった。

表2 条件ごとのサブタイプ化に関する変数の平均値 (標準偏差)

変数の種類	ND条件	D条件	統制条件
ステレオタイプ得点	4.17 (.64)	4.12 (.58)	4.11 (.46)
ステレオタイプあてはまり度得点	55.10 (26.70)	52.46 (23.04)	59.40 (16.23)
変動性の知覚	3.52 (1.09)	3.56 (1.01)	3.93 (1.05)
典型性の評定	2.52 (.98)	3.11 (.80)	— —

注1) ステレオタイプ得点の範囲は1～5。ステレオタイプあてはまり度得点の範囲は-100～+100。変動性の知覚の範囲は1～6。数値が高いほど東大生を有能である、東大生のうち有能である人の割合が高い、東大生はお互いに似ていると評定していることを意味する。

注2) 典型性の評定の範囲は1～6。数値が高いほど呈示された反証事例が東大生らしかったと評定していることを意味する。

ステレオタイプ反証事例の典型性の評定 条件ごとのステレオタイプ反証事例の典型性の評定の平均値は表2の通りであった。典型性の評定について、条件間で差があるか検討するためにt検定を行った。その結果、条件間の差が有意であった ($t(52) = 2.44$, $p < .05$)。D条件と比較して、ND条件では、ステレオタイプ反証事例を「東大生らしくない」と評定していた ($M = 3.11$ vs $M = 2.52$)。この結果は仮説2を支持するものであった。⁶⁾

ステレオタイプ反証事例の典型性の評定とターゲット集団に対する評定の関係 ステレオタイプ反証事例の典型性の評定とターゲット集団の評定の関連を検討するために、ステレオタイプ反証事例の典型性の評定とステレオタイプ得点、ステレオタイプあてはまり度得点、変動性の知覚の間の相関係数を算出した。その結果、ステレオタイプ反証事例の典型性の評定とステレオタイプあてはまり度得点との間に有意な負の相関が見られた ($r(54) = -.28$, $p < .05$)。つまり無能な東大生を「東大生らしくない」と評定するほど、有能である東大生の割合を高く推定していた。

(5) 考察

ターゲット集団に対する評定の結果は、男性実験参加者に限定されるものの、仮説1を部分的に支持するものであった。この結果について考察を進めるために、探索的にステレオタイプ反証事例の記述文の再生成績を従属変数、条件×性別を独立変数とした分散分析を実施した。その結果、性別の主効果が見られた ($F(1,50) = 8.79$, $p < .01$)。男性実験参加者よりも、女性実験参加者は、ステレオタイプ反証事例を多く再生していた ($M = 2.56$ vs $M = 2.92$)。この結果から、本実験で用いたディストラクション課題が女性参加者にとっては容易であったために、条件間でターゲット集団に対する評定に差が見られなかったのに対して、男性実験参加者にとっては課題

が適度に困難であったために、仮説1と一致するように条件間でターゲット集団に対する評定に差が見られたという可能性が考えられる。ただしディストラクション課題の困難度に関する評定では有意な性差が見られなかったことを考えると、別の要因が結果に影響を及ぼしていた可能性も否定できない。

D条件と比較して、ND条件では、ステレオタイプ反証事例の典型性を低く評定していた。この結果は仮説2を支持するものであった。つまり認知資源が乏しい条件と比較して、認知資源がある条件では、サブタイプ化が生起しやすいことを示唆していた。ただしこの結果については、認知資源があるND条件ではステレオタイプ反証事例を正確に記憶して、ステレオタイプ反証事例を「東大生らしくない」と評定することができた一方で、認知資源が乏しいD条件ではステレオタイプ反証事例を正確に記憶できなかつたので、「東大生らしくない」と評定することができなかつたという別解釈が考えられる。しかしD条件とND条件の間でステレオタイプ反証事例の再生数の平均値に有意差がなかつたことを踏まえて考えると、この別解釈は妥当ではないと言える。

さらに内部分析の結果ではあるが、ステレオタイプ反証事例の典型性を低く評定するほど、ターゲット集団をステレオタイプの的に評定していた。この結果は、ステレオタイプ反証事例をサブタイプ化することを通して、既存のステレオタイプを維持していたことを示唆するものである。

4. 総合考察

本研究の目的は、サブタイプ化の過程において知覚者の認知資源が果たす役割を検討することであった。2つの実験を通して、認知資源が乏しい条件と比較して、認知資源がある条件では、ステレオタイプ反証事例の典型性を低く評定したり、ターゲット集団をステレオタイプの的に評定したりしていた。これらの結果は、一部の対象者や指標に限定されたものではあるものの、サブタイプ化の過程において認知資源が必要であることを示唆するものと考えられる。

ただし本研究には、以下の2つの問題点が残されている。第一に、サブタイプ化の指標に関する問題である。本研究では複数のサブタイプ化に関する指標を取り上げて、認知資源との関連を検討したが、一部の指標においてのみ概念仮説を支持する結果が得られた。概念仮説を支持する結果が得られなかつた指標（特に手がかり再生課題おける記憶の混同）については、実験手続きを詳細に見直した上で再度、実験を実施し、サブタイプ化の指標として不適切であるのか、それとも実験手続きの上の問題でサブタイプ化を検出することができなかつただけであるのか検討する必要があるだろう。第二に、本研究で得られた結果の一般化可能性に関する問題である。本研究では、一部の実験参加者に限定されて概念仮説が支持されている。それ以外の実験参加者において概念仮説が支持されなかつた原因について詳細に検討し、概念仮説が支持される参加者とそうでない参加者の間にどのような違いがあるか、さらにそれがサブタイプ化の過程に影響する要因となり得るのか検討する必要があるだろう。加えて、本研究の結果が東大生以外のステレオタイプを扱ったときにも再現できるかという点に関しても検討する必要があるだろう。

引用文献

- Hewstone, M. (1994). Revision and change of stereotypic beliefs: In search of the elusive subtyping model. In W. Stroebe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology*. Vol.5. Chichester, England: Wiley. pp.69-109.
- Johnston, L., Hewstone, M., Pendry, L., & Frankish, C. (1994). Cognitive models of stereotype change (4): Motivational and cognitive influences. *European Journal of Social Psychology*, **24**, 237-265.
- Mauer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 812-824.
- Park, B., Wolsko, C., & Judd, C. M. (2001). Measurement of subtyping in stereotype change. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 325-332.
- Richards, Z., & Hewstone, M. (2001). Subtyping and subgrouping: Processes for the prevention and promotion of stereotype change. *Personality and Social Psychology Review*, **5**, 52-73.
- 佐久間 勲 (2009). サブタイプ化における認知資源の役割 (1) 情報研究, **40**, 57-68.
- 潮村公弘 (1995). ステレオタイプの認知とカテゴリー化情報の関係について—対人記憶、印象評定に及ぼす刺激手掛かりの効果— 実験社会心理学研究, **35**, 1-13.
- Taylor, S. E., Fiske, S. T., Etcoff, N. L., & Ruderman, A. J. (1978). Categorical and contextual bases of person memory and stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 778-793.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 961-977.
- Yzerbyt, V. Y., Coull, A., & Rocher, S. J. (1999). Fencing off the deviant: The role of cognitive resources in the maintenance of stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 449-462.

註

- 1) 本研究は、日本社会心理学会第45回大会および日本社会心理学会第47回大会にて発表されたデータを再分析し、加筆修正したものである。
- 2) 本研究の一部はJSPS科研費JP17730369の助成を受けたものである。
- 3) 手がかり再生課題とは、実験参加者に複数の成員情報（名前と記述文）を提示した後に、記述文だけを見せて、その記述文が誰のものであるか回答を求めるものである。たとえばTaylor et al. (1978) は、複数の男女の発言を聞かせた後に、ある発言が誰の発言であるか回答を求めている。このときに、知覚者が性別に基づいてカテゴリー化をしているのであれば、同性間での発言の記憶の混同（例：ある男性の発言を別の男性の発言と誤って判断する）が異性間での記憶の混同（例：ある男性の発言をある女性の発言と誤って判断する）と比較して多くなることを指摘し、それを例証している。Taylor et al. (1978) に基づいて考えると、サブタイプ化が生じていれば、ステレオタイプを反証する事例は集団全体から切り離されているので、手がかり再生課題において、ステレオタイプを確証する事例同士およびステレオタイプを反証する事例同士の記憶の混同（本研究では「上位集団内・下位集団内エラー」と呼ぶ）が、ステレオタイプを確証する事例と反証する事例の間の記憶の混同（本研究では「上位-下位集団間エラー」と呼ぶ）と比較して多くなることが予測される。
- 4) 佐久間 (2009) は大学生への予備調査の結果に基づき「東大生は有能である」というステレオタイプを用いている。そこで本研究でも同様のステレオタイプを用いた。
- 5) ステレオタイプ確証事例および反証事例に関する記述文の自由再生の成績、サブタイプ化得点についても女性のデータを除外した上で分析を実施したが、有意な条件の主効果や条件を含む有意な交互作用効果、条件間の有意な差は見られなかった ($F_s < 2.03$, ns ; $t = .70$, ns)。
- 6) ステレオタイプ反証事例の典型性の評定についても、条件×性別の分散分析を実施したが、性別の主効果および条件×性別の交互作用効果は有意ではなかった ($F_s < 2.71$, ns)。